**「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む」**

**待降節第4主日・A年（16.12.18）**

**メシア預言を生きる**

　いよいよ待降節の最後の週を迎え、降誕祭に向けて心をふさわしく整えることができるように、今日のみことばを、少し丁寧にふり返って見ましょう。

　まず、今日の第一朗読ですが、紀元前8世紀にユダ王国で活躍した預言者イザヤの体表的なメシア預言にほかなりません。ですから、当時の時代背景をも確認する必要があります。つまり、この素晴らしいメシア預言は、どのような状況において語られたのかを、知ることによって、この預言を、の世界の現状の只中でも受け止めることができることを確認できるからにほかなりません。

　とにかく、当時は、ユダ王国の王アハズの治世であって、周りの国々からの圧力に翻弄されていた危機の時代でありました。ですから、イザヤはその時代の国の有様を、**「王の心とその民の心は、林の木が風に揺れ動くように動揺していた。」（イザヤ7.2b）**と報告しております。

　しかも、中でも最も心を乱していたのが、何とアハズ王だったと言うのであります。ですから、神は、預言者イザヤに向かって次のように命令されます。

　**「の池の水道の脇で、アハズに会うために、出かけなさい。そして彼に言いなさい。『落ち着いて、静かにしていなさい。恐れることはない。また、心を弱くしてはならない。』」（同上7.3-4）**と。

　さらに、主なる神は、アハズに、直接、次のように命じられます。

　**「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深くの方に、あるいは高く天のに。」**と。つまり、神は、地の深みまでも、助けに来てくださり、王の危機の解決のために信仰の高みに引き上げてくださると言うのであります。

　ところが、アハズは、**「わたしは求めない。主を試すようなことはしない。」**と、まさに神に信頼していない自分をさらけ出します。つまり、**「主を試すことはしない。」**と言うのは、主を信頼していないというのが本音であって、結局、信頼することを拒否していることにほかなりません。

　ですから、そのような優柔不断の王の態度に憤慨したイザヤは思わず叫びます。

　**「ダビデの家よ、聞け。**

**あなたたちは人間に、もどかしい思いをさせるだけでは足りず**

**わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。**

**それゆえ、わたしの主御自ら**

**あなたたちにしるしを与えられる。**

**見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み**

**その名をインマヌエルと呼ぶ。」**

ここで、あえてに世界の現状を分析するならば、我々はアハズ王と同じように神に対するゆるぎない信頼を失っていないか謙虚に反省すべきではないでしょうか。

　確かに、イザヤの時代以上にの世界は、まさに地球規模の深刻な問題を抱えています。だからこそ、神に全面的に信頼しながら、出来ることから一つひとつと実行に移るべきではないでしょうか。

　ですから、教皇フランシスコは、その使徒的勧告『福音の喜び』によって力ずよく警告なさっておられます。

　**「今日においては、『排他性と格差のある経済を拒否せよ』と言わなければなりません。この経済は人を殺します。ホームレスに追い込まれたお年寄りが凍え死んでもニュースにはならず、株式市場で二ポイントの下落があれば大きく報道されることなど、あってはならないのです。これこそが排他性にほかなりません。飢えている人々がいるにもかかわらず食料が捨てられている現状を、わたしたちは許すことはできません。」（53項）**ちなみに、先日のテレビでは、我が国で毎年630万トンの食糧が捨てられていると報道されました。

**主が預言者を通して言われていたことが成就する**

では、次に、今日の福音を、少し丁寧に振り返って見ましょう。

　実に、今日のマタイによる福音は、ヨセフを主人公にイザヤのメシア預言が見事に成就したことを極めて完結に報告していると言えましょう。特に、注目すべきは、アハズ王とヨセフとのみことばに対する、つまり神に対する信頼の態度の大きな違いであります。

　とにかく、信頼の欠如からくる優柔不断のアハズ王とは、全く違って、ヨセフは最大の試練に、天使を通して語られるみことに確固たる信仰をもって聞き従ったのであります。そのときのヨセフの心境を、マタイは次のように伝えております。

　**「夫ヨセフは、正しい人であったので、マリアのことをにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように思い悩んでいると、主の天使が夢に現れて言った。『デビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。』・・・ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じられたおとり、妻を迎えた。」**

わたしたちも避けることのできない様々の試練に遭遇したとき、神のことばに全面的に聞き従うことによって、それらの試練をすべて乗り越えることができるのではないでしょうか。

　なぜなら、試練のにこそ、神の良き計らいつまり摂理が、同時進行するからであります。その典型的な実例は、アブラハムがその愛する独り子イサクをなんととしてげよとの残酷な命令に従ったときであります。

　とにかく、神の摂理に全面的に信頼しているアブラハムは、てきぱきと命じられたとおり行動に移ります。ですから、事の真相を全く知らないイサクは、けなげにも父親に尋ねます。**「火とはここにありますが、焼き尽くすにする小羊はどこにいるのですか。」**それに対してアブラハムは、優しくそして確信をもって答えます。**「わが子よ、焼き尽くすの小羊はきっと神が備えてくださる。」（創世記22.7c-8b）**

　待降節を締めくくるに当たって、メシア預言の成就に対する信頼を新にし、同時に神の摂理に対する信頼をさらに強めることができるように共に祈りましょう。